

府中のピオトープを見つめて

第2回 ピオトープめぐり（1）

今日、案内をしてくださるのは、東芝・社会インフラシステム社のKさん。このFacebookに、府中事業所で見つかった生き物情報を発信しているご本人である。

まず向かったのは、西の外れの梅林と外壁に沿った桜並木。ウメもサクラも植栽起源の人工林であるが、かなり大きく生長している。それらが間隔をおいて生えているので、見た目には疎林のようである。地表には日がよく当たるのか、下草が豊富に茂っている。ここではジャコウアゲハの幼虫がウマノスズクサについていた。その後、このチョウと食草は至るところで観察され、事業所を代表する生き物という印象を強くする。

桜並木を通り過ぎて、正面入り口に向かって歩いていくと、ケヤキやエノキ、エゴノキなどの大木が生い茂り、笹藪もある。下草刈りがされていないので、やや荒れた感じがする林だが、規模も大きく、いろいろな生き物が住む潜在力を感じる。夏の終わりの夕方、セミ時雨がものすごい。

府中事業所の歴史は約70年、その竣工は1940年代初めのことである。高度経済成長の黎明期であった当時、この一帯はまだ多摩川から連続する原野であった。そのなかに事業所の塀が立ち上がり、外の世界と隔絶された。計らずともそれが70年の時を封印したのである。多摩川の縁まで市街地が続く今となつては、この一帯にかつてあった自然は失われている。しかしその片鱗を事業所の緑地が留めている。少なくともその可能性がある。

敷地を西から北に横断する。さすがに中心部は工場の建屋が続き、自然の影は薄い。その途中にある何の変哲もない芝地で、Kさんが立ち止まった。

「ここにヒゲブトハナムグリがいます。絶滅危惧種の植物、ヒロハハナヤスリもあります。もちろんジャコウアゲハとウマノスズクサも」

これには驚いた。人工物に囲まれたただの芝地である。樹木といっても外来の園芸木くらいしかない。

ヒゲブトハナムグリはコガネムシの仲間で、疎林や林縁から続く草地に生息し、春に1回だけ地上に現れる。かつては都心にも生息していたが、1970年代半ばにほぼ姿を消した。多摩地域でも生息地は片手の数ほどもない。そんな珍しい昆虫がなぜいるのか。たぶん、この芝地の土がただものではないということだ。ヒゲブトハナムグリは土中で幼虫期を過ごす。この土は有機物に富んだ彼らには打ってつけの条件を備えているのだろう。ヒロハハナヤスリにしても同じこと。土が生育条件に適していたことはもとより、その埋土種子を長く温存していた可能性が考えられる。

府中事業所では芝地といえども侮るなかれ。70年前から継承されてきた自然の力があちこちにみなぎっている。



ヒロハハナヤスリ



ヒゲブトハナムグリ



ジャコウアゲハ



ウマノスズクサ

=====

執筆者紹介：新里達也

1 級ビオトープ計画管理士。農学博士。専門は保全生態学および昆虫分類学。著書に野生生物保全技術（共編）や日本産カミキリムシ（共編）などがある。(株)環境指標生物代表取締役。東京都国分寺市在住。